

© ACG プレスリリース – 展覧会開催のご案内 –

今井祝雄の音 – 開廊20周年記念展 Vol.3

Sounds of Norio Imai – ACG 20th Anniversary Vol.3



[1] 《Two Heartbeats of Mine》1976年 | インSTALLATIONサイズ(スピーカー: φ20.2x19.5cm) | スピーカー、心臓音 | Photo: Akio Takimoto

アートコートギャラリーでは今井祝雄の個展を開催します。

今井は、1960年代の白い造形表現から、'70-'90年代以降のフィルム、ビデオ、写真により時間軸を取り入れた作品、また、そこに自身や他者の身体を介入させるパフォーマンスなど、時代の変化に感応するかのごとく幅広いメディアと作品形態によって表現活動を続けてきました。その最初期より作家の関心を捉えていたのが音の存在です。本展では、心臓音と当時の様々な音響メディアを素材に制作・発表された'70年代の作品群を、今井と長年の親交のあるアーティスト藤本由紀夫から技術面・構想面での協力を得て、資料とともに網羅的に展示します。また、カセットテープと録音された音声を視覚的・身体的に鑑賞するための最新のインスタレーションと共に、その多彩な表現営為を「音」という切り口からご紹介します。

初めてロックコンサートに行った際、音が足元から身体を伝わってくるのに驚いた。音は耳だけではなく、触覚として体験できることを知った。またレコードを聴きながらスピーカーを見ていると、音の振動がスピーカーのコーン紙の動きによって作られていることから、音は視覚としても体験できるということを知った。どちらも中学生の頃であった。

その後、音響機器や電子機器を使うことにより新しい表現を試みる電子音楽やミュージック・コンクリートの存在を知り、将来の方向を漠然と描くようになった。ただ音楽という情緒的な表現には少しばかり違和感があった。音を思考の道具として哲学的に考察するようなことはできないかと思っていたが、私の脳内では具体的な方法が浮かばなかった。

電子音楽を勉強するために大学に入学し、しばらく経過したある日「美術手帖」のページを捲っていたら、大阪の中心地、難波のど真ん中の道路に向かって心臓音を流しているアーティスト達がいることを知った。今井祝雄との初めての出会いであった。

藤本由紀夫 (本展協力者)

【展覧会概要】

観覧券別： **今井祝雄の音 – 開廊20周年記念展 Vol.3** *Sounds of Norio Imai -- ACG 20th Anniversary Voi.3*

会 期： **2023年5月13日 [土] – 6月24日 [土]** *休廊: 日・月

会 場：アートコートギャラリー 〒530-0042 大阪市北区天満橋1-8-5 OAPアートコート1F

開廊時間：11:00–18:00 [土曜日–17:00]

◆関連イベント：5月20日 [土]

14:00 -15:30 対談【今井祝雄 × 藤本由紀夫(アーティスト)】

15:30 -17:00 レセプション *対談は要予約、定員20名 (E-mail: info@artcourtgallery.com または Tel: 06-6354-5444) *いずれも参加無料

主催：アートコートギャラリー(株式会社八木アートマネジメント) | 協賛：三菱地所株式会社、三菱マテリアル株式会社、三菱地所プロパティマネジメント株式会社

◆ 作家略歴

1946 大阪府生まれ

1965 大阪市立工芸高校美術科洋画コース卒業

具体美術協会会員となる。1972年の解散まで全ての具体美術展に参加

1966 第10回シェル美術賞 一等賞受賞

1979 毎日の自画像《デイリーポートレート》の制作を開始。現在まで継続

1991 第2回大阪市都市環境アメニティ表彰

現在 成安造形大学名誉教授

【1960-90年代の初期作および音に関する主な作品歴】

1963 第14回茨木市展(茨木市立養精小学校、大阪)に、数字や文字を並べた平面作品2点[*右図 2,3]を出品。市長賞受賞。

1967 16mmフィルムの各コマにパンチで穴を開けた映像《円》を第1回草月実験映画祭(草月会館ホール、東京/弥栄会館、京都)に出品。作品に初めて音を取り入れ、イメージの知覚に音が大きく影響することを認識する。

1972 《この偶然の共同行為をひとつの事件として…》:今井、倉貫徹、村岡三郎による街頭イベント。3階建ビル屋上の3台のトランペット・スピーカーから各々の心臓音を御堂筋(難波、大阪)に向けて発した。

1973 《踊る心》:仰向けに置かれたむき出しのスピーカーから今井の心臓音が発され、「IMAI」とタイプされた紙片がコーン紙の振動で飛び跳ねるインスタレーション。「〈音器〉および〈飛翔音符〉への試み」(ギャラリーペテ、大阪)

1974 《The Braun Tube》:ブラウン管に流れるTV放送をビデオカメラで撮影することにより、テレビの音と現場音、映像とブラウン管に映る鏡像が重なり合う。「インパクト・アート・ビデオアート'74」(ギャラリーインパクト、ローザンヌ、スイス)

1975 《The Party》:今井、植松奎二、村岡三郎のコラボレーション。斜めに床置きした3つのスピーカーの各々から発せられる3人の心臓音に加えて、マン・レイのメトロノーム作品《破壊されざるオブジェ》の金属音が合奏するインスタレーション。「The Party」(ギャラリー16、京都)《The heart beat》:仰向けに置いたむき出しのスピーカーの上で「IMAI」とタイプされた紙片が心臓音の響きで振動して飛び跳ねる映像作品。「第8回現代の造形—現代美術50人展」(大丸京都店)

1976 《Two Heartbeats of Mine》:面合わせに吊り下げられた2基のスピーカーから、異なる時期に録音した作家の2つの心臓音が響き合うインスタレーション。「日本の現代作家展“デュシャンを透して…”シリーズ個展(ギャラリーペテ、大阪)[*前頁 図1]

《八分の六拍子》:闇の空間で心臓音がメトロノームの音へと移行し、6/8拍子ごとに作家が観客をストロボで写真撮影した。「映像表現'76」(KBSレーザリアムセンター、京都)

1977 《四つの音》:4人から提供されたレコード盤4枚を十字に切断し組み替えたもの。

1993 《原田の音石》:藤本由紀夫との共同制作。アルミで型どった“巨石”正面のラッパ状の穴から、石の頂部より垂直に伸びるパイプを通して上空の音が共振して聴こえる屋外彫刻。(豊中市立老人福祉センター前庭、大阪)。

HEAR(岡本隆子、藤本由紀夫)によって企画された「MUSIC」展(ジーバック・ホワイエ、神戸)に、《Two Heartbeats of Mine》のインスタレーション(1993年制作)、《この偶然の共同行為をひとつの事件として…》(1972)と《The Party》(1975)の記録パネルを出品。

【主な個展】

2022 今井祝雄 おとだま(+1 art、大阪)

2021 今井祝雄 SQUARE(ユミコチバアソシエイツ viewing room shinjuku、東京)

2019 今井祝雄—行為する映像(アートコートギャラリー、大阪)

2018 今井祝雄—物質的恍惚 (アクセル・ヴェルヴォールト・ギャラリー、ワインエーゲム、ベルギー)

2016 今井祝雄 Retrospective—方形の時間(アートコートギャラリー、大阪)

2014 今井祝雄 Retrospective—影像と映像(アートコートギャラリー、大阪)

2013 白のイベント(アクセル・ヴェルヴォールト・ギャラリー、アントワープ)

2012 今井祝雄 “具体大学”のころ(成安造形大学、大津) 今井祝雄 Retrospective—17才から22才(アートコートギャラリー、大阪)

2005 今井祝雄—デイリーポートレイトの四半世紀(夢創館、神戸)

1996 BACK & FORTH 今井祝雄・白の空間1964-1966(ギャラリー16、京都)

1981 ビデオによる個展(ザ・バンク、アムステルダム) Videotape Performance(ビデオギャラリーSCAN、東京)

1980 矩形の時間(ギャラリーキタノサーカス、神戸)

1979 自画像による個展(番画廊、大阪)

1976 6/8拍子 Part2(アート・コア・ギャラリー、京都)

1971 個展(ウォーカー画廊、東京)

1966 個展(グタイピナコテカ、大阪)

1964 17歳の証言(ヌーナ画廊、大阪)

【主な収蔵先】

芦屋市立美術博物館/大阪府/大阪中之島美術館/京都国立近代美術館/国立国際美術館(大阪)/滋賀県立近代美術館/兵庫県立美術館/宮城県美術館/成安造形大学/福岡市総合図書館/アクセル・アンド・メイ・ヴェルヴォールト財団(ベルギー)/ゲティ・センター(ロサンゼルス)/ラチョフスキー・コレクション(グラス)/ファーマサイエンス・コレクション(カナダ)/天目里美术馆(杭州市)



[2] 《work ①》1963年
プラスチック建材、
ボードパネルにステンシル
169.5 x 88 cm



[3] 《work ②》1963年
コラージュ(新聞紙)、ステンシル
169.5 x 92.8 cm

【お問い合わせ】アートコートギャラリー | 担当: 清澤倫子・福田 | ※ビジュアル資料ご希望の方は、お気軽にお問合せ下さい。

〒530-0042 大阪市北区天満橋1-8-5 OAPアートコート1F TEL:06-6354-5444 FAX:06-6354-5449 E-mail:info@artcourtgallery.com www.artcourtgallery.com

新作《音声の庭》について

私たちの会話において発される音声の数々。そのほとんどは記憶の彼方に消え去り、ときに記憶の中に沈潜していく。だがそれを録音するとき、そこには再生することを目的とした記録の意思が働いている。監視カメラと同様に電話でさえも。とはいえ、一度は再生されても、あるいは全く再生されることなく、データとして何らかのメディアの中に封印されるも多くは廃棄されていく。いっぼうで、記録されない会話とその音声の行方は？

そんな興味から、2022年秋より機会を得た12人(組)と個別に交わした会話を、再生しないことを前提にカセットテープに録音した。今回の展覧会では、音声をメディアの痕跡として視覚的かつ体験的な場を設えたいと思う。

今井祝雄

◆ 作品解説

1960年代前半、当時17歳だった今井祝雄は、新聞紙を貼り付けた上に数字や文字を並べた平面作品を発表し、また、廃棄されていたスピーカーのコーン紙を支える金型を白い布で覆い平面空間上に立体的な起伏を生み出したレリーフ状の作品を制作しています。それらの最初期作品について、今井は「情報化社会」のイメージが念頭にあったとし、「情報とは文字だけじゃなく音もそうなんです。氾濫する音のイメージをビジュアルに表せたら、と。*1」と回想していますが、この言葉からも、同時代の社会を表象する要素として「音」の重要性を作家が敏感に感じ取っていたことがわかります。

具体美術協会に参加していた1964・'72年の代表的な白いレリーフ状の作品シリーズでは、何かを覆い隠すことでカンヴァスの表裏の境界面に起伏として現れる形象、そしてそこに生まれる陰影という不定形な現象をも作品の一部としてとらえ、さらに具体後期にはその表面にスライドの映像を投影するなど、物質と非物質を組み合わせることで、作品存在と鑑賞体験双方の拡張を試みます。1967年には16mmフィルムの各コマにパンチで穴を開けた映像《円》に初めて音を取り入れ*2、微動する円のイメージの知覚に音が大きく影響することを認識したといえます。

そして、具体が解散した1972年から'76年にかけて、今井は心臓音と様々な音響メディアを素材に表現を展開します。今井を含む美術家3名の心臓音を大阪の都心、道頓堀と御堂筋の交差点に位置するビルの屋上からスピーカーで流し、「街の騒音と人間の生命体としてのリズムを相互に浸透」*3させる試み《この偶然の共同行為を一つの事件として》(1972)*4や、面合わせに吊り下げられた2基のスピーカーから、異なる時期に録音した作家の2つの心臓音が響き合うインスタレーション《Two Heartbeats of Mine》(1976)*5、ドーム空間の暗闇の中、心臓音が6/8拍子を刻むメトロノームの音へと移行し、拍子に合わせて客席の鑑賞者を作家がストロボ撮影するパフォーマンス《八分の六拍子》(1976)*6など、それらは全て、自己と他者、人間と機械の食い違いや共鳴が生み出す一種のリズム、あるいは、現在と過去の間が存在する無数の「今此処」へと見る(聴く)者の感覚を開くもので、異なるもの同士を重ね合わせることで初めて感知される「何ものか」についての思考をうながすという点で*7、初期のレリーフの表現にも通じるものであり、「音」という流動的な存在を素材にすることにより、作品を対峙するものから鑑賞者を取り巻く環境へと変化させ、両者の境界を曖昧にしてしまう実験精神に富んだ実践でした。

「情報過多、或いは間接的な体験としての情報の宿命かもしれないが、そのような日常生活の中から、真の出会い、直接の触れ合いを忘れさせるだけでなく、人々を“虚”としての日常空間に埋没させはしないだろうか。*8」テクノロジーに追従する人間社会に対して、今井が好奇心と不安という相反する意識を抱いていたことを考えると、音を素材とする作品展開において、心臓音という生身の肉体から発せられる音が選ばれたことは象徴的です。多様なメディアを用いた'70年代以降の今井の作品は、新たな技術が次々と生み出される時代と向き合いながら、情報伝達のメディアに隠された物質としての特性や表象の限界を巧みに炙り出してゆく「装置」として機能したとも言えます。そして、情報技術がアナログからデジタルへ移行して久しい現代、カセットテープというアナログ・メディアを用いて、「再生しないことを前提に」他者との対話(肉声)を録音するという逆説的な行為の反復によって構成された最新作の時空間は、私たちにどのような経験と問いをもたらすのでしょうか。

1. 今井祝雄「インタビュー 聞き手:平井章一(2012年10月13日)」『今井祝雄—具体とその後』アートコートギャラリー、大阪、2014、p.21。
2. このときのサウンドは今井本人ではなく、当時放送局に勤務していた山本諭が担当した。
3. 会場となったビル一階の通りに面したショーウィンドウに会期中貼り出されたステイトメントより抜粋。
4. 今井祝雄、倉貫徹、村岡三郎による街頭イベント(協力:谷口一雄)。1972年7月20～30日、午前9時から深夜1時まで、御堂筋と道頓堀角に位置する3階建てのビル内の喫茶店に置かれたエンドレス・テープによって3人の心臓音が再生され、屋上に設置された3台のトランペット・スピーカーから鼓動が流れた。さらにそれはビル一階の通りに面したショーウィンドウに展示されたオシロスコープへと繋がり、音の波形として視覚化された。
5. 初出:1976年「日本の現代作家展“デュシャンを透して…”」シリーズ個展(ギャラリー・ベテ、大阪)。
1993年に藤本由紀夫が企画した「MUSIC」展(ジーベック・ホワイエ、神戸)にも出品された。
6. 1976年「映像表現'76」(KBSレーザーリアムセンター、京都)。
ストロボ撮影された観客席の写真34枚組(ゼラチンシルバークラウドプリント)、当時録音されたサウンド(オリジナル音源、デジタイズ版ともに)として残されている。
7. 「異質なものを重ね合わせる」という今井作品のアプローチについての解釈は、大日方欣一氏の次の文章でも詳しく論じられている。
大日方欣一「映像表現へー1970年前後」『今井祝雄 タイムコレクション』水声社、東京、2015
8. 今井祝雄「観念と日常の間」『月刊オール関西』1970年6月号、pp.138-139。
ミン・ティアンボ「Video Killed the Radio Star—今井祝雄と映像」『今井祝雄—具体とその後』アートコートギャラリー、大阪、2014、p.57参照。

◆ 主な出展予定作品・資料

*作品の成り立ちについては作家略歴内の【1960-90年代の初期作および音に関する主な作品歴】を参照。



《Two Heartbeats of Mine》
1976年 | スピーカー、心臓音
インスタレーションサイズ(スピーカー: φ20.2x19.5cm)
Photo: Akio Takimoto
本展ではオリジナルのスピーカー2基による
インスタレーションを展示。音響監修:藤本由紀夫



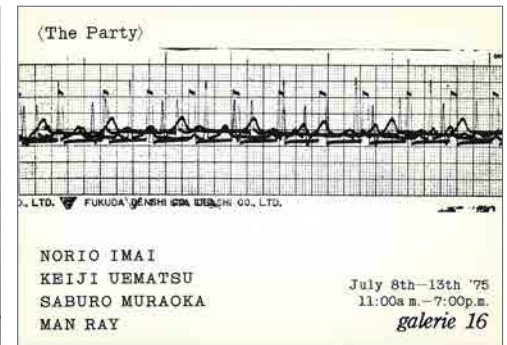
《音声の庭》
2023年
12本のカセットテープを用いた新作インスタレーション。



《この偶然の共同行為をひとつの事件として……》

1972年 | トランペットスピーカー、オシログラフ、心臓音 | インスタレーション(道頓堀・御堂筋角、大阪)

本展では今井、倉貫徹、村岡三郎の心臓音が記録されたオリジナルのオープンリールテープ、展示風景の写真、展覧会DMなどを展示予定。



《The Party》

1975年 | スピーカー、メトロノーム、心臓音 | インスタレーション、サイズ可変(「The Party」ギャラリー16、京都)

本展では今井、植松圭二、村岡三郎、メトロノームのオシログラフ、スピーカーの写真、展覧会DM、展示風景の写真などを展示予定。



レコード完成イメージ



今井祝雄Retrospective—方形の時間(アートコートギャラリー、大阪、2016年) 展示風景

《八分の六拍子》

1976年、心臓音とメトロノームの音 | パフォーマンス(「映像表現'76」KBSレーザーリアムセンター、京都)

本展ではオリジナル音源から新たに製作したレコードにて展示・再生予定。音響監修・製作協力:藤本由紀夫
また、観客をストロボ撮影した34点組の写真(ゼラチンシルバークラウドプリント、各24 x 30 cm)より3点を展示予定。